

漢字の神話を推薦する

戦後、青少年の國語力の低下が指摘され、特に漢字を知らないといふ批判が起こってから、すでにかかなりの年月が経った。かういふ事態を招いたのも、元はといへば戦後に強行された当用漢字や現代仮名遣などの一連の國語政策に原因があると思はれるが、一面ではそのために世間の関心が漢字に向けられるやうになった。

大体、漢字を非難する意見は随分昔からあるが、それにも拘らず、漢字は仲々幅を利かせてゐる。勿論、明治から大正、昭和に至るまで、普通に使はれる漢字は次第に減って来てゐる。そして戦後、当用漢字が制定されてから一層その傾向は甚だしくなつてゐる。併し決して漢字はなくならないし、仮名やローマ字の文章が増えもしない。それどころか、1850の当用漢字では絶対に間に合わないのが実情である。漢字は将来なくなるだろうか、本圀の支那でさえ漢字を廃止しようとしてゐるのだから、日本も廃止しないと世界で唯一の漢字使用國になるぞとか、警告して下さる向もある。よその國がどうしようと構はないが、実際はさうなつてゐないし、最近ではむしろ漢字の価値が再認識されてゐる位で、少くとも現在生きてゐる我々や次代を背負ふ子供達も漢字を捨て去ることは、到底考へられないのである。

漢字は難しいといふ論がある。私は世界の文化語、例へば英語やフランス語の綴りに比べて、特に難しいとは思へない。併し難しからうが易しからうが、必要なものは覚えなければならないのである。

しかし従来、漢字の学習法に関しては見るべき研究もなく、進歩もなかった。これを遺憾として、著者は本書を著して体系的な学習法を発表されたの

である。ここにいふ体系的学習法とは、漢字をその構成要素に分解し、分類して、それぞれの基本的意味を明かにし、漢字を連繋させて証明することによって、記憶に便利なようにまとめたものである。その内容は、近來進歩した漢字の原始形や原始義に関する研究に負ふところがあるが、著者独自の研究も多く含まれる。従つて、多少問題の部分もあらうが、要するに記憶に役立ち、未知の文字への手懸りを与えるのが主眼なのである。ただし当用漢字の新字体が、この効果を十分に發揮し活用することを妨げてゐるのを私は遺憾に思ふ。

著者石井君と私が相識したのは、もう十年ほど前のことである。石井君は戦後高校の教師となつたが、生徒の國語力に不満を抱くとともに中学の教育に疑問を感じて中学の教師となり、更に転じて指導主事となつたが、根本的には小学校の教育に問題のあることを知つて、自分考案による國語教育実践の場を求めて小学校教師となつた人である。私は先づ同君の教育と真理追及に対する情熱に敬服した。次いで同君の主唱するいはゆる石井方式の教育に感嘆した。いはゆる石井方式とは、「一般に漢字で表記される言葉は小学一年生から漢字で教える」といふことを基本とする方法で、私は同君の研究授業を数回にわたつて參觀した結果、その効果を十分に承認したのである。(詳細は同君著「私の漢字教育」黎明書房刊参照)。

およそ石井君の主張の強みは、すべて実験済みであることにある。私は石井方式の教育が広く実施研究されることを切望するが、少なくともこの書によって漢字に対する認識を新たにされる方の一人でも多くなることを期待して止まない次第である。(原文のまま)

昭和42年7月31日

東京大学教授文学博士
宇野 精一

館長注記:原文は縦書きであるが、横書きに変更している。また、漢数字での表記の多くを算用数字に変更している。